

今週の為替相場見通し(2025年10月6日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		146.59 ~ 149.50	147.45	147.00 ~ 151.00
ユーロ	(ドル)		1.1683 ~ 1.1778	1.1745	1.1600 ~ 1.1800
(1ユーロ=)	(円)		172.30 ~ 174.84	173.15	173.00 ~ 176.00
英ポンド	(ドル)		1.3401 ~ 1.3526	1.3470	1.3300 ~ 1.3700
(1英ポンド=)	(円)	*	197.49 ~ 200.43	198.82	196.00 ~ 201.00
豪ドル	(ドル)		0.6547 ~ 0.6629	0.6600	0.6450 ~ 0.6700
(1豪ドル=)	(円)	*	96.86 ~ 98.15	97.35	96.50 ~ 100.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

国際為替部 為替デリバティブチーム 部坂 洋太郎

(1)今週の予想レンジ: 147.00 ~ 151.00 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

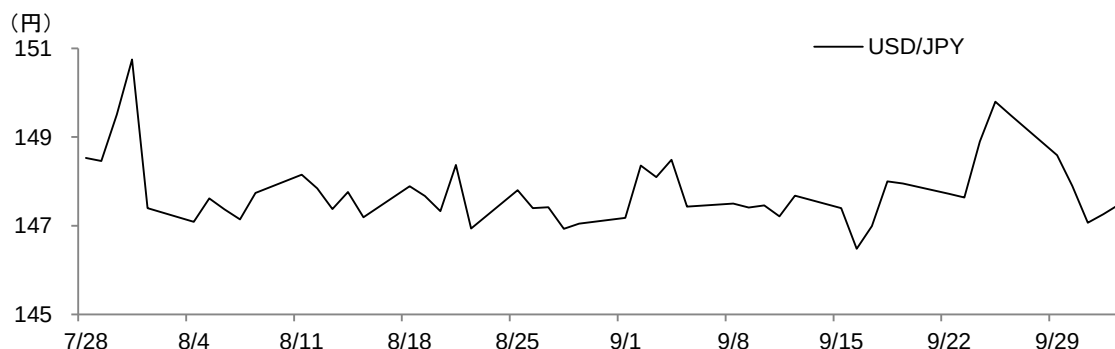
先週のドル/円は週を通して下落となった。週初9月29日、東京時間のドル/円は149.42円でオープンした後、ハト派である野口日銀審議委員の「政策金利調整の必要性がこれまで以上に高まっている」との発言や米国の政府閉鎖懸念から上値が重い展開となり148円台半ばまで下落となった。30日、東京時間は月末実需のフローにより148.85円まで上昇した後、日銀の追加利上げ期待および米政府機関閉鎖に伴うリスクオフの流れから148円を割り込み、一時147.65円まで下落となりクローズ。10月1日、米国時間に発表された米9月ADP雇用統計が予想を下回ると一時146.59円まで下落。一方で米9月ISM製造業景況指数が事前予想を上回ったことで147円台まで値を戻して引けとなった。2日、特段の材料がない中、ロンドン時間に146.60円まで下落するも、米国時間に米金利上昇を背景に147円台前半まで値を戻して引けとなった。3日、植田日銀総裁の講演にて特段利上げを示唆する発言がなかったことからドル/円は上昇。海外時間に米9月ISM非製造業景況指数の結果を受けて下落するも米9月雇用統計といった主要指標の発表がなかったため方向感の乏しい値動きが続き147.45円で越週となった。

今週のドル/円は自民党総裁選にて事前予想に反して高市氏が選出されたことを受けてドル高円安に振れる展開を想定する。4日(土)の総裁選後の会見においても高市氏は、「日本の経済はギリギリの状態」といった発言や「賃金主導でのインフレになるまで日銀と対話を密に」といった足許のコストプッシュに伴う利上げに関して慎重的なスタンスの発言の中、今月の日銀政策決定会合における利上げ状況を見極める展開となるだろう。6日(月)発表される日銀支店長会議のさくらレポートや来週以降に予定している日銀要人の発言に注目が集まる。ただし、長期的なドル/円の値動きを見れば150円を越えたタイミングにおいては実需においても売りが出やすいタイミングとなり一方的に150円台を越えてドル高円安が進む展開にはならないと予測する。一方で、米国においては政府機関閉鎖による主要経済指標の発表が延期となった不透明な状況も継続しているが、つなぎ予算が成立となり政府機関閉鎖が解消となれば円安の材料となることも留意しておきたい。今週予定されている経済指標の予定は、6日(月)に日銀支店長会議(さくらレポート)、8日(水)FOMC議事要旨、10日(金)に米10月ミシガン大学消費者マインドの発表が予定されている。

(3)先週までの相場の推移

先週(9/29~10/3)の値動き:

安値 146.59 円 高値 149.50 円 終値 147.45 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

国際為替部 為替営業第一チーム 大島 経貴

(1) 今週の予想レンジ: 1.1600 ~ 1.1800 173.00 ~ 176.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

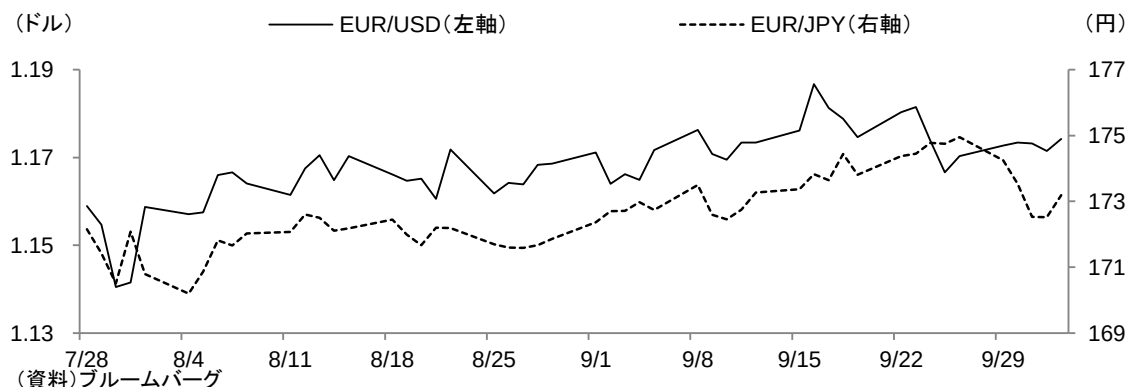
先週のユーロ/ドルは1.17台を中心としたレンジ推移となった。週初9月29日、1.1705でオープンしたユーロ/ドルは複数Fed高官からタカ派的な発言があったものの、反応は見られず、むしろ米金利低下が下支えとなり1.17台半ばへ上昇した。30日、独9月CPIは市場予想を僅かに上回るも、反応は限定的。軟調な米経済指標を受け、1.17台後半へ小幅高となる場面も見られたが、その後反落。10月1日、米連邦政府機関の閉鎖決定が報じられると、ドル売り主導で上昇、週高値となる1.1778を付けた。この日発表されたユーロ圏9月CPIは市場予想と一致すると市場の反応はなかった。さらに、米9月ADP雇用統計の軟調な結果、市場予想を上回った米9月ISM製造業景気指数と強弱入り混じる米経済指標が発表されると、ユーロ/ドルは1.17台半ばを挟む展開となった。2日、全般的なドル安の中でユーロも強含むも、米金利の上昇が重しとなり、週安値となる1.1683へ反落。もっとも米金利が低下へ転じると再び1.17台前半へ値を戻した。3日、米9月ISM非製造業景況指数の低調な結果を受け、直後は1.17台後半へ上昇も、その後は米金利上昇を受け下落。結局、1.1745でクローズした。

今週のユーロ相場も先週に引き続き方向感ない推移を予想する。10月1日(水)に発表されたユーロ圏9月CPIは前月より伸びが加速。9月会合にてディスインプレプロセス終了を宣言したラガルドECB総裁の考えを補強するものとなった。9日(木)には9月ECB政策理事会の議事要旨が発表されるが、先週発言したECB高官らも現状の政策金利を支持する姿勢を表明しており、新しい材料とはならないと予想。引き続き政策金利維持が見込まれ、ユーロ相場の下支えとなりそうだ。他方で、今週はフランスの政治情勢には注意を払いたい。予算案提出の期限が13日(月)に迫る中で、週明けに政策方針概要の提示の際に不信任決議に発展する可能性もある。ユーロへの下押し圧力となる可能性があり、ヘッドラインには留意したい。もっとも、先週のユーロ相場を左右したのは、政府機関の閉鎖を巡る米国発の材料だろう。市場では当面の政策金利据え置きが見込まれ、ECB高官発言からの新規材料も期待できない中で、今週もドル主導のユーロ相場は続きそうだ。米政府機関閉鎖の影響で重要経済指標の発表が延期される中、10月会合へ向けたパウエルFRB議長ら、Fed高官からの発言に注目したい。また、米政府機関再開への動きがあればドル買いで反応するだろうが、米労働市場への懸念が燦る現状、反応は一時的なものとなるだろう。

(3) 先週までの相場の推移

先週(9/29~10/3)の値動き:

(対ドル) 安値 1.1683	高値 1.1778	終値 1.1745
(対円) 安値 172.30	高値 174.84	終値 173.15



3. 英ポンド

欧州資金部 神田史彦

(1) 今週の予想レンジ: 1.3300 ~ 1.3700 196.00 ~ 201.00 円

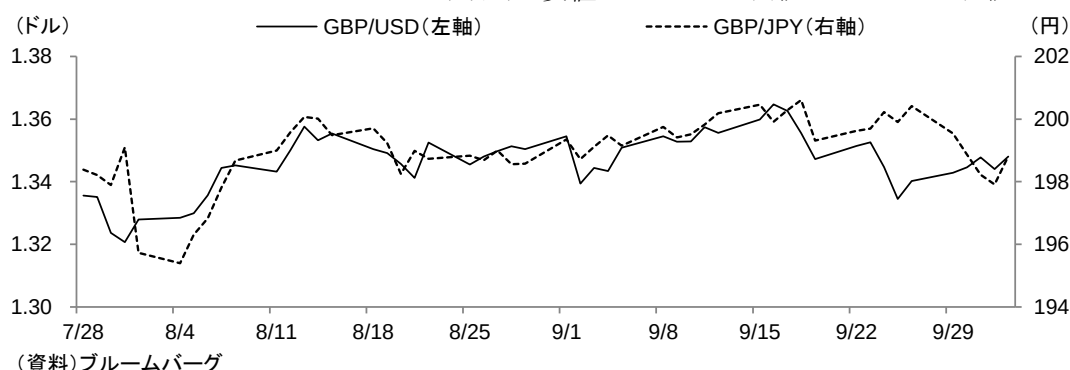
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は上値重いながら堅調推移継続。週初9月29日は1.34台で始まる。米政府閉鎖懸念でドルが弱い立ち上がり。30日も1.34台でもみ合い。10月1日は米9月ADP雇用統計が予想を下回る中で1.35台へ上昇する場面もあったが、米政府機関閉鎖によるその他関連指標の公表延期もあってか勢いは続かず。2日は、特段のヘッドラインはなかったが、米ハイテク株が買われる中でドルが反発し、1.34レベルへ下落する場面もあった。週末3日は、米9月雇用統計が政府機関閉鎖の影響で見送りとなる中だったが、発表された米9月ISMサービス指数が予想を下回ると1.34台後半へ上昇した。英ポンドは対円で下落。9月29日に200円レベルで始まるとドル/円の動きにつれて上値重い立ち上がり。連日値を切り下げ10月2日には198円を明確に割り込む。3日は、植田日銀総裁の発言を受けてやや円安推移に198円台で取引されたが、週末4日に予定される自民党総裁選を睨んでか動意薄だった。

今週の英ポンド相場は、上値重いながら堅調推移継続を見込む。英指標面からは特筆すべきものは予定されていない。英中銀の政策決定も今月はなく、金融政策面からのトレンド変更は見込まない。米政府閉鎖のヘッドラインにドルがどう振れてくるかに拠るだろう。一部では不十分なデータ量によりFEDの利下げへの影響が懸念されているが、スワップ市場の10月利下げ織り込みにとりたてて変化は見られていない。また、某米系ブックメーカーでは執筆時点で、米政府機関閉鎖の解消は10日以降になるとの見方が8割を超えていた。とりわけ15日(水)以降の再開を見込む向きが5割弱と多く、今週中の再開はややサプライズとなりそう。ひとまず、株などのリスク資産が同問題を懸念しているようには見えないが、問題が長引き市場センチメントの悪化を招く場合には、英ポンドは対ドルで上下どちらにも振れる可能性があるため状況は引き続き注視が必要だ。

(3) 先週までの相場の推移

先週(9/29~10/3)の値動き: (対ドル) 安値 1.3401 高値 1.3526 終値 1.3470
(対円) 安値 197.49 高値 200.43 終値 198.82



4. 豪ドル

国際為替部 為替営業第二チーム 鈴木 智大

(1) 今週の予想レンジ: 0.6450 ~ 0.6700 96.50 ~ 100.00 円

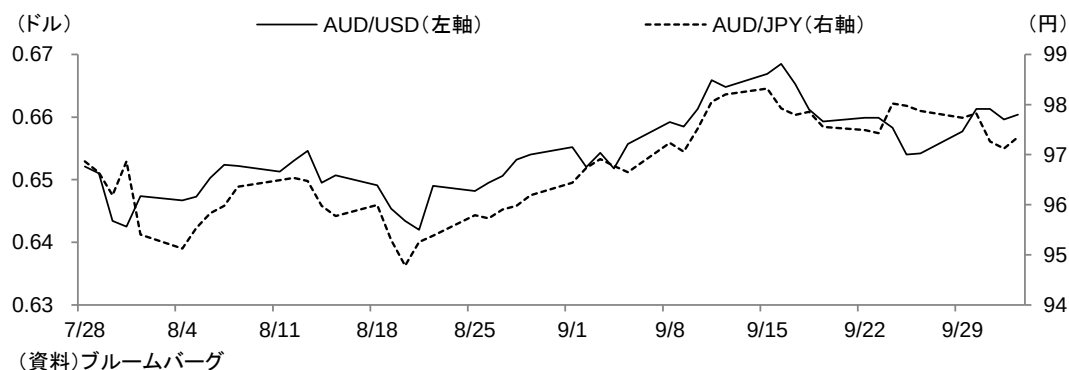
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

週初9月29日の豪ドル相場は0.6554でオープンし、米政府機関の閉鎖を懸念したドル売りが優勢。じり高推移で0.65台後半まで値を上げ、ドル売り一服後は同水準で方向感を欠く展開となった。30日はRBA理事会が、市場予想通り政策金利を3.60%で据え置くことを決定。声明文でインフレ圧力の再燃に対する懸念が示されたこともあり、発表後市場は豪ドル買いで反応。ブロックRBA総裁の会見でも、インフレへの警戒感が示されたことで更に水準を上げ、0.66台を突破。その後も米経済指標の結果をこなしながら高値圏での推移を維持してクローズした。10月1日、序盤はじり安の展開で0.6600を割れる水準まで値を下げる。ただ、根強いドル売りにほどなくして値を戻し、米9月ADP雇用統計の予想を下回る結果を受けたドル売りをサポートに、一時週間高値となる0.6629まで上昇。その後は方向感なく0.66台前半でもみ合いが続いた。2日は材料に乏しい中、米国時間にドル買いが強まったタイミングで0.65台後半まで下落。その水準では下げ止まるも、0.6600を前に終始上値の重さが意識される値動きとなった。3日は米9月雇用統計の公表が延期となるなど、材料のない中で小動き。0.6600を挟んで方向感を欠き、0.6600で越週した。

今週の豪ドル相場が堅調な推移になることを予想する。9月30日(火)のRBA理事会では市場予想通り政策金利の据え置きが決定。過去の利下げの効果の検証にはまだ時間がかかることや国際的な経済動向および豪州経済への影響を見極めることを念頭に、今後の政策運営においても引き続き「慎重な姿勢を支持することが適切」との意向が示された。また10月下旬に公表予定の豪7~9月期CPIが、前回会合時の予測を上回る可能性が示唆されたことに加え、ブロックRBA総裁が会見内で、今後の複数回の利下げに含みを持たせつつも、インフレ進行への懸念を強調したことが市場でややタカ派と評価されたことも、豪ドル買いを促す材料になると考えている。一方、米国は米政府機関の一部閉鎖に伴い、米9月雇用統計の公表が延期となるなど、金融政策の行方をより見通しづらい状況になっている。これまでの動向に照らせば、インフレ再燃に対する一定程度の懸念はある一方で、雇用市場の下振れリスクやトランプ米政権による強力な圧力もあり、継続的な利下げ実施が既定路線。重要指標の公表延期で、少なくとも利下げ基調を覆す材料が出ないという事実に基づき、緩やかに続くドル売り地合いが豪ドルをサポート。さらに、世界的な株価上昇や銅価格の堅調さも豪ドル相場の下支えになると予想する。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(9/29~10/3)の値動き: (対ドル) 安値 0.6547 高値 0.6629 終値 0.6600
(対円) 安値 96.86 高値 98.15 終値 97.35



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。